

## 「友」と「敵」の間\*

——エマソン、ソロー、ポーに見る友愛のパラドックス——

金澤 哲

### 1

今さら言うまでもなく、「友愛」あるいは「友情」とは、我々にとってきわめて身近かつ当たり前のもののようにありながら、実はその定義・本質をめぐり、古来議論が積み重ねられてきたものである。たとえばインターネット上の *Stanford Encyclopedia of Philosophy* は、“Friendship”の項目におよそ12000語、プリントすると約24ページにわたる長大な説明を捧げている。

そもそも友情をめぐる議論の歴史は長く、プラトンはその初期の対話編『リシシュ』においてソクラテスに友情の本質を探らせるが、結論においてその探求が失敗に終わったことを語らせている。またアリストテレスは、『ニコマコス倫理学』第8・9巻を「愛」（フィリア）の検討に当て、そのなかで詳細に「友愛」の特質を分析している。

近代になると、モンテーニュは『エッセー』第2巻「友情について」において、自らのたぐいまれな友情について説明しつつ、アリストテレスに帰せられる有名な呼びかけ「おお、わが友人たちよ、私には友人などひとりもない。」を引用している。もっとも彼にとって、この逆説めいた呼びかけは世間並みの「ありふれた友情」に当てはまるものであり、彼の言う「最高最上の友情」とは無縁のものであった(30)。

さらに現代ではジャック・デリダが、『友愛のポリティクス』の冒頭でモンテーニュによる引用を再引用し、このパラドキシカルな表現を起点に、「友情」

の複雑かつ矛盾に満ちた性質について広範な議論を展開している。

デリダの議論は、例によって多彩な引用と目くるめく逆説に裏付けられたものであり、そこで彼はモンテーニュ＝アリストテレスに始まって、ニーチェ、シュミット、ハイデガーらの論考を引用しながら、「友愛」の特異な在り方を浮かび上がらせている。

そのなかで、ニーチェの議論（『悦ばしき知識』第61節）からデリダが引き出してくる重要な論点の一つが、「非自己固有化」という概念である。これは平たく言えば、愛する者が愛する対象を我が物とみなさない、という態度のことであるが、デリダはニーチェを踏まえて、次のように述べている。

このような非自己固有化 [dépropriation] は、それについてニーチェがその真の名、その「正しい名」は友愛だと結論づけているこの別の「愛」のほうへと、たぶん合図を送るだろう。この友愛とは、一種の愛ではある。だがそれは、愛よりもいっそう思いやりのある磁力を帯びた [aimant] 愛なのである。(112)

さて、この概念が重要なのは、友愛・友情において愛する者と愛されるものの距離がつねに問題となるからである。たとえば、上に触れたモンテーニュの場合、無二の友人ラ・ボエシーとの友情において、「ふたつの魂は混じり合い、完全に渾然一体となって、もはや両者の縫い目もわからないほど」であったと述べている(27)。二人の間に距離は存在せず、だからこそモンテーニュはアリストテレスの言葉を引いて、二人は「体がふたつある心」と言ったのである(31)。

では、ここに見られる友愛は、ニーチェ／デリダの言う「自己固有化」の罟を逃れているのであろうか？ 二人が友愛において完全に一体化し、自他の区別が消滅しているのであれば、一方が他方を我が物としているとは言えないであろう。その意味で、モンテーニュとラ・ボエシーの友情は、確かに唯一無二のものであったように思われる。

だが見逃してはならないのは、『エッセー』におけるこの記述が、ラ・ボエシーの死後に書かれているという事実である。すなわちモンテーニュがこのような理想の友愛について記した際、二人の間には実のところ無限の距離があったのである。この事実はモンテーニュの記述を完全に無効化するとは言えないまでも、少なくとも友愛における当事者間の距離という問題が簡単に消え去るものではないことを示しているように思われる。また、多少意地の悪い言い方をすれば、「自己固有化」を完全に逃れる愛情とは要するに死者への愛情であり、その意味で最高の友人とはすでに亡くなった友ということになる。このように考えると、「おおわが友たちよ、一人も友がない。」という呼びかけの持つ皮肉あるいは痛切な意味が、一層理解できるのではないだろうか。

もうひとつ、デリダが友愛の特徴として挙げているのが、その「おそらく来るもの」という性質である。すなわち、「友」はその到来が当然予想されるものではなく、常識的・理性的予想を超えて、あくまで「おそらく」出来るものだということである。この考えのものとなっているのは、ニーチェの『善悪の彼岸』における「おそらくの哲学者」という言い方であるが、この「おそらくの哲学者」とは、「諸価値の対立」を疑い、いわゆる対立概念がもしかしたら本質において同一なのではないかと考える「新しい哲学者」のことである(18-20)。デリダを引用しておこう。

おそらく来るだろうもの、それは単にあれこれのものではない、それはついに、〈おそらく〉の、おそらく、そのものの思考なのだ。おそらく到着者は到着するだろう、というのも、到着が問題である以上けっしてそれを確信してはならないのだから。ところがその到着者が、それもまた〈おそらく〉そのものであり、〈おそらく〉の、未聞の、まったく新しい経験であるだろう。未聞の、まったく新しい、どんな形而上学者もまだあえて思考したことのないような経験。

ところが、この〈おそらく〉の思考こそが、おそらく、出来事というものの唯一可能な思考を開始するのだ。来るべき友愛と将来のための友愛の

思考を。というのも、友愛を愛するには、哀悼のうちに他者を携えるすべを心得ているだけでは十分ではなく、将来を愛さなくてはならないからだ。そして、将来のためのカテゴリーとして、〈おそらく〉というカテゴリー以上に正しいものはない。(54-55)

そしてデリダは、この「おそらく」到来するものという考え方を、「テレイオポイエーシス」という言葉を使って説明していく。

この思いがけない到来の「論理」、その「発生論」、その「レトリック」、その「歴史的なもの」、その「政治」等々を、〈テレイオポイエーシス〉的なものと呼ぼう。teleiopoiesis と形容されるのは、たくさんのコンテクストおよび意味論的秩序において、絶対的な、完全な、完成した、終了した、完了した、終止したものに<sup>する</sup>ものであり、完成 = 終焉に [à terme] 到達させるものである。しかし、もう一つの *télé* とも戯れることを許していただきたい——距離と遠さを言う *télé* とも。というのも、ここで問題となるのは、まさに、遠隔的な距離の詩学であり、文の構造そのものによる空間の踏み越えにおけるある絶対的な加速化であるからだ。(60)

この「おそらく」または距離の問題については、さらに考えてみたいが、その前に友情をめぐる幾多の考察において、もう一つ特に注目に値する点を述べておきたい。それは、「友」について語る際、必ずと言っていいほど、「敵」という語・概念が現れることである。

たとえば、『リュシス』の中でプラトン描くソクラテスは、友とはいかなる存在かを問う際、くりかえし「敵」を引き合いに出す。しかも重要なことに、議論の流れの中で、ソクラテスはとかくこの「友」と「敵」の対立関係を曖昧にし、たとえば「敵が友にとって友なのか、それとも友が敵にとって友なのか」などと問いかけるのである(45)。

またデリダはニーチェやシュミットさらにはブレイクまで持ち出し、「友」と

「敵」の対立を繰り返し解体していく。それは先に触れた「おそらく」という概念、あるいはその元となったニーチェの「新しい哲学者」の考え方とつながるものである。たとえば、デリダは「おおわが友たちよ、一人も友がない。」のニーチェによる転倒である「敵たちよ、一人も敵がない！」（デリダ、91。ニーチェの訳も『友愛のポリティックスⅠ』による。）を引用し、そこに「おそらく来るだろうもの」（54）としての友愛への〈トレイオポイエーシスの呼びかけ（76）を見出している。

友があるのは敵がありうる場所においてでしかないのなら、「敵が必要だ」あるいは「その敵を愛さなくてはならない」は、待ついとまもなく、反感を友愛に変形してしまう、等々。私が愛する敵たちは私の友たちである。私の友たちの敵たちと同様。敵に対する必要あるいは欲望を持つや否や、数えることができるのは友のみになる。敵も含めてそうなのであり、またこの反対のこともある。それがわれわれを狙っている狂気である。一步ごとに、〈トレイオポイエーシス〉的な出来事のたびに。（60-61）

あるいは、

二つの概念（友／敵）はその時から交差し、交換し合うことをやめない。両者は、あたかも互いが愛し合うかのように、螺旋状の双曲線に沿って絡み合う。（124）

ここまで主にデリダに依りながら、友情・友愛の逆説的な性質を確認してきた。これを前置きとして、以下、エマソンの友情論に話を進めたい。*Essays: First Series* (1841) 中、6番目のエッセイ“Friendship”である。

## 2

エマソンによる友情論の最大の特徴は、その ambivalence である。このエッセイの中で彼は友情・友人を歓迎し、その理想を説く一方、最も重要なのは自己であり、人間に真に必要なのは孤独であると繰り返し主張する。つまり自己信頼の人エマソンにとって友人とは、一種のパラドックスなのである。さらに言えば、エマソンの文章は友について ambivalent に揺れ動きながら、とかく否定的になるときの方が、そのレトリック・表現に冴えを見せるのである。

具体的にテキストを引用しよう。有名な部分であるが、友人論の中に出てくる架空の友に宛てた手紙である。

Dear Friend: -

If I was sure of thee, sure of thy capacity, sure to match my mood with thine, I should never think again of trifles, in relation to thy comings and goings. I am not very wise: my moods are quite attainable: and I respect thy genius: it is to me as yet unfathomed; yet dare I not presume in thee a perfect intelligence of me, and so thou art to me a delicious torment.

Thine ever, or never.

親愛なる友よ

もし私が、あなたについて自信があり、あなたの能力、あなたの気持ちに私の気持ちを合わせることに自信があれば、私は二度と些細なこと、あなたの往来などに関して、思い煩わないでしょう。私はそれほど賢明ではありません。私の気持ちは、わかりやすいものです。私はあなたの能力を尊敬しています。それはいまだ私には、計り知れないのです。とはいえ、私はあなたが完全に私のことを知っているとは僭越にも想定するわけには、いかないのです。それ故あなたは、私にとって甘美な拷問なのです。

永遠にあなたの、あるいは決してあなたのものではない者。

このように、エマソンにとって友情・友人とは、きわめてパラドキシカルなものであり、望ましいものであると同時に、自己を脅かす可能性のある、それゆえ警戒すべきものであった。エマソンの警戒感は、次の引用に明らかに読み取ることができる。

Friendship requires that rare mean betwixt likeness and unlikeness, that piques each with the presence of power and of consent in the other party. Let me be alone to the end of the world, rather than that my friend should overstep by a word or a look his treal sympathy. I am equally baulked by antagonism and by compliance. Let him not cease an instant to be himself.  
(122)

友情は、似ていると似ていないとの間の、あのまれな中庸を必要とする。それは他方の中に存在する力と同意の中で、それぞれが自信を持つ（刺激を受ける、嫉妬する）というものである。世の果てまでも、一人にさせてほしい。あろうことか友がそのまなざしや一言漏らしたその言葉で、真の共感を踏み越えてくるくらいならば。私は敵意に対してと同じくらい、同意に対して、しり込みするものだ。一瞬たりとも、自らであることをやめさせるな。

このような思考を突き詰めたとき、友と敵の区別がつかなくなるのは、論理的な必然であろう。それを端的に表すのが、次の一文である。“Let him be to thee forever a sort of beautiful enemy.” (124)「汝にとって友を永遠に一種の美しい敵たらしめよ。」

このように、エマソンにとって友と敵は分かちがたく重なっていた。結果として、理想の友を求めるエマソンの思考は、そのまま自己を脅かす敵を呼び出すものであったのである。このエッセイは、エマソンの揺れ動く思考の軌跡そのものであった。

## 3

ここでエマソンの非常に近くにいたソローの友情論に目を転じよう。エマソンとソローの関係は、複雑かつ微妙であり、それ自体が友情論の興味深い題材となりうるものであるが、詳細はたとえば Buell の議論を参照してもらおうこととし、ここではソローの書いた友情論に話を限定したい。

ソローの友情論は、『コンコード川とメリマック川の1週間』の水曜日の章に登場する、長い脱線部分である。同書はソローがウォールデン湖畔の小屋に滞在中、6年前（1839）に兄ジョンとともに出かけたボート旅行を思い出して書いた回想記であり、旅の記録とさまざまな思索・随想が入り混じる不思議な形式をとっている。

その友情論であるが、ここでソローはエマソンとは異なり、友情の可能性を論理的に追い詰め否定するといったことはしていない。それどころか、基本的にソローは友情の可能性を信じているように思われる。ただし、その友情はエマソンのような困難をも踏まえた、独特のものである。たとえば以下は、架空の友人がその友に向かって語る一種の宣言である。

“I never asked thy leave to let me love thee, —I have a right. I love thee not as something private and personal, which is your own, but as something universal and worthy of love, which I have found. O how I think of you! You are purely good, —you are infinitely good. I can trust you forever. I did not think that humanity was so rich. Give me an opportunity to live.” (269)

「私はあなたに、あなたを愛していいかといった許しを求めたことはない。私には権利がある。私があるあなたを愛するのは、あなただけの私的なもののためではない。私はあなたを普遍的で愛に値するものとして愛するのだ。それを私は見つけたのだ。どれほど私があるあなたを思っていることか！ あなたは純粋によきもの、無限によきものだ。あなたを永遠に信頼する。人



類がこれほどの富を有しているとは、思わなかった。私に生きる機会を与えたまえ。」

この宣言が先に見たエマソンの架空の手紙と対をなすことは、明らかであろう。エマソンは、架空の友に宛てた手紙の末尾に“Thine ever, or never.”と記し、友人の存在に対する ambivalence を明らかにしていたが、このソローの友人は、相手が何と言おうと自分には相手を愛する権利があると高らかに宣言し、かつそれは相手の自己への侵害などではなく、より普遍的かつ「愛情に値するもの」への愛として愛するのだと主張する。

二人の対比は鮮やかであり、エマソンは友情に懐疑的あるいは悲観的、ソローは積極的あるいは肯定的である。ただし、ソローの宣言“I love thee ... as something universal and worthy of love”は明らかに同語反復的であり、論理的というよりはむしろ論理を拒もうとするものである。その意味で、やはりソローも友情・友愛に関わるパラドックスに気が付いていたと見なすことも可能かもしれない。だとすれば、エマソンとソローの違いは、見ているものの違いではなく、互いに見ているものへの態度の問題ということになるであろう。

その証拠に、ソローもまたエマソンのような懐疑を語っているところがある。引用しよう。

Yet what right have I to think that another cherishes so rare a sentiment for me? It is a miracle which requires constant proofs. It is an exercise of the purest imagination and the rarest faith. (272)

しかし私にどんな権利があるだろうか。他の人間があればほど稀な思いを私に向かって抱いていると考えるなどとは。それは絶え間ない証明を求める奇跡だ。それはこの上なく純粋な想像力と、最もまれなる信頼の働きなのだ。

ここでソローは友情というものが期待しがたいもの、奇跡、もっとも純粋な

想像力と類まれな信頼の働きによるものと言っているが、実はこれは先に触れたデリダの「おそらく」の思想そのものである。このように見てみると、ソローはエマソンと実はそれほど異なるわけではない。またデリダの逆説もけっして奇をてらったものではなく、エマソンやソローの述べるところとそれほど離れたものではないことがわかるであろう。

ちなみに、先にソローとエマソンの違いは、態度の問題であると述べたが、別な言い方をすれば、思弁的なエマソンに対し、ソローの友情論には performative などところがある。実は先に述べたように『コンコード川とメリマック川の1週間』はソローが兄ジョンとともに出かけた探検旅行の記録であるが、ジョンは旅行から3年後の1842年に亡くなっており、ソローは兄の死からさらに3年後に、亡き兄と二人で行った旅のことを思い出してこの本を書いた。Johnsonによれば、同書はソローが兄の死を悼んで書いたパストラル・エレジーであり、ここで描かれている理想の友人とはジョンであった(47)。とすると、ここでソローが友情の困難を認めつつ、なおもその可能性に肯定的であったのは、理解できるであろう。

ちなみに、『コンコード川とメリマック川の1週間』を通じて、ジョンの名が示されることはなく、二人は基本的に複数形の we で示される。このようにして、ソロー兄弟は死を隔ててなお一体であり、究極の友人同士であった。

それはちょうど、先に触れたモンテーニュが無二の友人ラ・ボエシーについて語っているのと、同じ事情である。モンテーニュもまた友人の死後に友人のことを語り、「体がふたつある心」という言い回しで一心同体ぶりを誇っていた。すなわち、最高の友情は死も絶対的な距離も超える。だがその訪れは、ソローによればもっとも純粋な想像力と類まれな信頼の働きの結果なのであり、それをデリダ流に言えば、友人とは「おそらく」来るものであり、「距離の詩学」によってもたらされるものなのである。

超絶主義者たちの密なネットワークのただ中にいたエマソンやソローと異なり、ポーと友情あるいは友人というトピックは、想像しにくいところがあるかもしれない。実は2019年に出版された分厚い *The Oxford Handbook of Edgar Allan Poe* には Sandra Tomc による “Edgar Allan Poe and His Enemies” という章があり、こちらの方がポーらしいと思われる。一方、友と敵の分がちがたさ、あるいは共通性こそ本論がここまで述べてきたことであり、その意味で友愛をめぐる議論の最後にポーと敵について検討するのは、それほど的外れではないかもしれない。

事実、同論考において Sandra Tomc は当時のプリントカルチャーを検討し、従来の紳士の友情を前提としたいわば「お友だち」的ネットワークに基づく雑誌出版のあり方を、ポーがいかに刷新していったかを明らかにしている。ポーの業界刷新の手法は、簡単に言えば、他の作家・編集者たちのなれ合いを暴露・攻撃し、スキャンダルを引き起こすほか、そのように攻撃された作家たちからの反論・再反論を雑誌に掲載して読者の興味を引くことであった。

つまりエマソンあるいはソローの論じていた「超越主義的友愛」の世界とは全く別次元で、ポーは友／敵の境界線を乗り越え、その差異を解体していたのである。それはポー個人の資質の問題というよりは、より大きなプリントカルチャーの問題であった。さらに Sandra Tomc はポーのニューヨーク進出に関して、次のように述べている。

In late 1844, when Poe moved to New York and took his job at the *Evening Mirror*, he was effectively stepping into the world of his enemies. The very fact that Poe was hired by its owner and editor, Nathaniel Parker Willis, suggests the extent to which enemies and friendships had interchangeable functions in Poe's world, for it was Willis and his fellow *Mirror* editors whom Poe had so mercilessly pilloried while working for the *Messenger*. (565. 下線引用者。)

このように当時のプリントカルチャーでは、友と敵の区別は消滅し、雑誌販売戦略上の選択に還元されていったのである。

もちろんこれは、先に見たエマソン・ソローの議論とは全く異なる次元の話である。あえて言えば、ポーはエマソン・ソローの超越主義的友愛論の行きついた世界を、より世俗的な形ですでに生きていたと言ってもいいかもしれない。

ではポーの文学世界における友と敵の関係は、どうなっているであろう。ポーの短編における友／敵と言えば、「盗まれた手紙」や「ウィリアム・ウィルソン」あるいは「群衆の人」などが浮かぶであろう。だがここでは、短編「ライジーア」(1838)を取り上げ、ポーにおける友・敵のドラマを見てみたい。

「ライジーア」のあらすじについて、説明は不要であろう。ここで確認しておきたいのは、まず語り手である「私」とライジーアの関係はまず「友人」として始まったことである。また語り手は彼女の特異な美しさを、特にその目の不思議な魅力を強調して描写するとともに、彼女の並外れた知性と学識を強調し、彼女への怖れにも似た愛情と依存を語っていく。「私」にとって、ライジーアが自分を愛してくれていることは信じがたいことであった。「私」とライジーアの関係は、上に引いたソローの言葉を借りれば *an exercise of the purest imagination and the rarest faith* とでも呼ぶべきものであった。それはまさしく、ありうべからざることの到来だったのである。

物語のクライマックスは、死への屈服を拒み、死を克服できると信じつつ亡くなったライジーアが、「私」の再婚相手ロウィーナの亡骸から復活し、「私」の前に立ちはだかる場面である。ここでポイントとなるのは、「私」が死の床から立ち上がったのがライジーアだついに認めるのが、その目を見たときだという点である。

And now slowly opened *the eyes* of the figure which stood before me. “Here then, at least,” I shrieked aloud, “can I never—can I never be mistaken—these are the full, and the black, and the wild eyes—of my lost love—of the Lady—of the LADY LIGEIA!”

そして今や、私の前に立ったものは、目をゆっくりと開いた。「もはやこれは、どうしても」私は声を出して叫んだ。「決して、決して間違えようがない。これこそはあの大きな、あの黒く、あの荒々しい目、我が亡き妻の、あの気高い、あのライジーアの！」

言うまでもなく、この短編の前半で語り手がライジーアの目の不思議な魅力について語っていたのは、この結末のための伏線であった。目はライジーア最大の特徴であり、その目を再び発見したとき、「私」は驚きと恐怖のために、ほとんど自失の状態に陥ってしまう。

ここで「私」の驚きと恐怖について、立ち止まってさらに考えてみよう。まず亡くなったばかりの妻ロウィーナがライジーアに取って代わられるというのは、人知を超えた出来事であり、それは驚愕と恐怖の体験だったはずである。

事実、ここでの語りには、「私」の主体・自我の崩壊といった感じがつきまわっている。このセンテンスがそのまま物語の結末であるため、「私」がよみがえったライジーアをどのように迎えたか、読者は知ることはできない。だが最後のエクスクラメーションマーク、そしてここで物語が断ち切られているという事実は、彼の主体が存在をやめたこと、人知を超えた出来事を前にして、言語を超えた空白の空間が切り開かれたことを強く示唆する。

それは言い換えれば、論理を超えたあり得ない事態の出来、「テレオポイエーシス」的瞬間であろう。つまりこのライジーアの復活こそ、論理を超えた友／敵の現前の瞬間であり、だからこそ語り手は自失状態に陥るのである。

この点を強く示唆するのが、先に触れたライジーアと「私」の関係である。ライジーアは彼の友人であり、その後ふたりは結婚するのみならず、ライジーアは esoteric な彼の研究の導き手となる。そして、死の床にあるライジーアの愛の告白は、語り手に二人の関係の奇跡的な性質を痛感させる。このように、二人の関係は常識的なレベルの夫婦あるいは友人を超え、ソローあるいはエマソンの思い描いた超越主義的友愛に近づいている。

それ以上に重要なのは、先ほど指摘したライジーアの目である。エマソンに

あつては、目こそ世界を認識する主体のよりどころ、あるいは主体そのものといってもいいようなものであった。目がもう一組の目を見つめ、目と目が向き合う瞬間とは、エマソン流に言えば、ふたつの自己が向かい合い、対峙する瞬間であろう。そのとき二つの主体は同一化するか、反発し相手を飲み込むか飲み込まれるか、いずれかであろう。「ライジーア」の結末は、まさにそのような目と目の対峙であり、圧倒された語り手は、いわばライジーアの目＝主体に飲み込まれ、自らの主体を失うのである。これこそ、エマソンが最も恐れていた事態であり、エマソンにとってこれは恐怖の瞬間にほかならなかったであろう。

このようにポーは、「ライジーア」において友／敵が目の前に現れるときの言語に絶した瞬間を劇的に描いた。それはエマソンやソローが回避していた瞬間の、これ以上はない巧みな表現であり、友愛というものの破壊的可能性の表出であったように思われる。

## 5

ここまでデリダの友愛論を手がかりに、エマソン、ソロー、ポーの「友愛のパラドックス」とでも呼ぶべきものについて調べてきた。

デリダの議論のポイントは、友／敵の不可分性と友・友愛の出現の奇跡性の指摘であった。この点がエマソン、ソローの友愛論そしてポーの短編とも深くかかわるものであったことは、これまで見てきたとおりである。

最後に話を広げると、デリダの友愛論は実は冷戦後に「敵」を失った「西側自由諸国」の混乱した状況を射程に入れたものであり、それはそのまま常に敵を見だし、それによって友を得ようとする現在のアメリカの状況と直結するものである。アリストテレス／ニーチェの「おおわが友たちよ、一人も友がない。」／「敵たちよ、一人も敵がない！」という相反しつつ呼応し合う呼びかけは、まさしく現在という時代の叫び声だと言えるであろう。

では我々は、この状況からどのように脱し、友と出会うことができるのだろうか。デリダ流に言えば、それは論理を超えた「テレイオポイエーシス」的

な瞬間を待ち受けることにほかならない。この「おそらく」の瞬間が来るとき、それはライジーアの復活のような言語を超えた体験となるのであろう。それは敵から立ち上がる友、「友を超えた友」、友／敵の区別を超えた名付けようもない存在の訪れであり、その瞳に吸い込まれる自己崩壊・自己解体の瞬間かもしれない。とすると「友」あるいは「友を超えた友」は、自己解体の末に見出されるのであろうか。おそらくは。

\* 本論文は、2021年12月18日に開催された日本英文学会関西支部第16回大会におけるシンポジウム「分断の時代の孤独／融和」（司会・講師松宮園子、講師田中祐子、横内一雄、金澤哲）における発表「孤独／友をめぐるパラドクス」の内容に加筆修正を加えたものである。

#### Works Cited

- アリストテレス『ニコマコス倫理学』、上下、高田三郎訳。岩波文庫、1971。
- デリダ、ジャック『友愛のポリティックス I』、鶴飼哲、大西雅一郎、松葉祥一訳。みすず書房、2003。
- ニーチェ、フリードリッヒ『善悪の彼岸 道德の系譜』、ニーチェ全集 11、信太正三訳。ちくま学芸文庫、1993。
- 『悦ばしき知識』、ニーチェ全集 8、信太正三訳。ちくま学芸文庫、1993。
- プラトン『リュシス 恋がたき』、田中伸司、三嶋耀夫訳。講談社学術文庫、2017。
- モンテーニュ、ミシェル・ド『エッセー 2』、宮下志朗訳。岩波書店、2007。
- Buell, Lawrence. *Emerson*. Belknap Press of Harvard Univeristy, 2003.
- Emerson, Ralph Waldo. *The Collected Works of Ralph Waldo Emerson. Vol. II. Essays: First Series*. Joseph Slater, General Editor. Cambridge: Belknap Press of Harvard Univeristy, 1979.

- “Friendship.” *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. <https://plato.stanford.edu/entries/friendship/> (accessed 2021-11-28).
- Johnson, Linck C. “A Week on the Concord and Merrimack Rivers.” Myerson, Joel. Ed. *The Cambridge Companion to Henry David Thoreau*. CUP, 1995. 40-56.
- Kennedy, J. Gerald and Scott Peeples eds. *The Oxford Handbook of Edgar Allan Poe*. OUP, 2019.
- Poe, Edgar Allan. *Collected Works of Edgar Allan Poe. Tales and Sketches 1831-1842*. Ed. Thomas Ollive Mabbott. Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press, 1978.
- Porte, Joel and Sandra Morris, eds. *The Cambridge Companion to Ralph Waldo Emerson*. CUP, 1999.
- Thoreau, Henry David. *The Writings of Henry David Thoreau. A Week on the Concord and Merrimack Rivers*. Ed. Carl F. Hovde. Princeton: Princeton University Press, 1980.
- Tomc, Sandra. “Edgar Allan Poe and His Enemies.” Kennedy J. Gerald and Scott Peeples eds. *The Oxford Handbook of Edgar Allan Poe*. OUP, 2019. 559-575.